

連載 講座

第26回

人災地域の復興策・羽柴秀吉

作家 童門冬二

人間社会を襲う災厄には、地震・津波などの自然災害が、中には“人災”もある。火災などもそうだし、また歴史を振り返ると戦国時代には“合戦”という戦争も大きな人災だったろう。

織田信長が天下事業を展開する上において、この理想や目的に反対する中国地方の小大名制圧は、腹心の羽柴秀吉が担当した。中国地方の入り口は播磨国（兵庫県）だ。玄関と言っているような入口に頑張っていたのが、三木城の別所長治（べっしょ・ながはる）である。まだ二十歳代だったが、領民の人望も厚く名君として知られていた。それだけに味方する近隣大名が多い。これをまず降伏させなければ、信長の事業は糸口にもつけない。期待を持たれた秀吉は三木城攻略に全力を注いだ。当時はまだ、竹中半兵衛という名軍師がいた。半兵衛は、

「三木城は落とすのが難しい城です。直接攻撃するよりも、兵糧攻めの方がいいでしょう」といった。秀吉はこれを採用した。しかしこの攻略戦の途中で、竹中半兵衛は死んでしまう。後を引き継いだのが黒田官兵衛だ。官兵衛は半兵衛と仲が良かった。そこで半兵衛の兵糧攻めをそのまま引き継いだ。しかし考えようによってはこれは残酷な作戦だ。城に籠った将兵にすれば、やはり武器を取って華々しく敵と戦った方が納得がいく。つまり武士らしく死ねるからだ。それが食べ物次第になくなり、水も飲めなくなって、日干しのよう

にされて死ぬのは屈辱的であり武士として不名誉だ。その辺の心理の推移を含めて、半兵衛はそういう作戦を立てたのだらう。いってみれば「まず、武士の誇りを叩き潰す」というやり方なのである。

結果としてこの作戦は成功する。食べる物も飲む水もなくなった三木城内では、ついに城主の別所長治が秀吉の処に使いを出す。それは、
「三木城に籠る主戦派は、自分と弟の友之、それに叔父の別所吉親の三人だった。この三人が切腹するから、どうか城内の将兵や一般庶民を助命していただきたい」という願書である。秀吉は官兵衛と相談しこれを承諾した。城の門が開けられ、続々と籠っていた将兵や一般人が脱出して行った。別所長治・友之・吉親の三人は、約束通り見事に腹を切って果てた。

城下町はすでに焼き払われていた。それは食料や水の搬入などをはっきり監視するため、展望をよくするために焼け野原にしてしまったのである。秀吉は自分が非情な作戦をとったことや後ろめたい気持ちを持っていた。そのため、

「一日も早く三木の城下町を復興したい」

と考えた。そこで官兵衛と相談し、「三木の町の復興は、どうしたらいいだろうか」と相談した。黒田官兵衛は、

「普通の復元ではなく復興としましょう」と応えた。秀吉は訊く。

「復元でなく復興とは？」官兵衛はこう応える。

「復元だと、ただ昔どおりの町に戻すということです。しかし三木の町は一旦焼けたのですから、新しい町に作りかえた方がいいとおもいます」

さらにかれば、現在の言葉を使えば次のような説明をした。

- ・ 復興には、復元だけでなく創造性を加える必要があること
- ・ 創造性というのは、「新しい町のC・Iを設けること」
- ・ C・Iというのは、単なるコーポレート・アイデンティティではなく、コミュニティ・アイデンティティ（地域特性）と呼ばれるようなものを創造すること
- ・ それには、旧住民だけでなく新しい住民もどんどん流入させること
- ・ しかし、新しいC・Iを創造するにはやはり金がかかるので、三木に住む住民たちの負担を軽くすること

などである。しかし、その新しいC・Iをどんなものにすればよいか、というのが問題になる。黒田官兵衛は流入してくる新住民の動態をじっと見つめた。そのうちに、

「大工が多い」と知った。焼け落ちた町でまず人間にとって必要なのは何といっても住宅だ。それを建てるために、在来の大工たちだけでは足りない。それにどこかの国へ逃げ出してしまった者もいる。代わりに、どんどん需要に応じて新しい大工が流入していた。この大工たちはそれぞれ道具を持って来る。しかし諸国からやって来るので、その道具にそれぞれの出身地の特性があった。官兵衛はこれに眼を着けた。

「大工道具をつくる町にしたらどうだろうか」

ということである。大工道具というのは、鉋や鋸などの鉄製品のことだ。中国山脈には鉄を豊かに産出する山々が連なっている。原料には困らない。官兵衛はそう考えてこれを秀吉に具申した。

秀吉は目を輝かせ、

「よし、それで行こう」と承知した。町の辻に立札が立てられた。それには秀吉の指示で、

- ・ 三木の町を新しく作り替えたいこと
- ・ そのために、旧住民の速やかな復帰とさらに新住民の流入を歓迎する
- ・ 旧住民も新しい住民も、当分の間負担はかけない。地子（住民税や固定資産税）や課役（義務労働）も当分見送る
- ・ 新しい町の性格として三木を“金物の町に育てたい”

したがって、大工や金物業者たちは、この趣旨をよくわきまえて大いに頑張ってもらいたいというようなものである。このすぐ効果を示した。なにしろ負担が全くないというのだから、こんな嬉しい地域はない。どんどん人が入ってきた。そして黒田が観察した大工たちの持っている道具は、てんでんばらばらだ。しかし官兵衛は、

「これが、新しい道具を生むきっかけになる」と思った。その通りだった。鍛冶屋たちは、大工たちが次々と持ってくる道具を見て、

「これを一つにまとめてやろう。それが新しい三木の町の特性になる」と考えた。その通り実行をはじめた。やがて新しく蘇った三木の町は、

「金物の町。特に大工道具」と言われるようになる。そしてこの伝統は後世にまで引き継がれ、現在でも三木市は“金物の町”として有名だ。この時秀吉が立てた高札はその後長く保存され、三木市の住民に次々と替わる権力者に対し、

「これが秀吉公が保証した三木町の特権です」と、負担軽減を求める物証に使ったという。だから、当時から秀吉の人気は決して悪くなかった。自分たちの町を滅ぼした元凶であるにも関わらず、三木町の住民たちは新しい彼の復興策に賛同し、同時に自分たちの生きる場を得たからである。